

氏名：斯波春野

所属：人文学部 人間文化学科 一年

派遣大学：ガジャマダ大学（インドネシア）

派遣期間：平成27年8月26日～9月8日（二週間）

#### ・指導内容

週に5日、一日2回の授業を行いました。日本語教室の参加者は工学部や農学部、経済学部の学生が多く、日本語学科の学生はいませんでした。日本への留学を希望していたり、すでに決定している学生もいました。

学生のレベルはひらがなの読み書きができないレベルから日本語で会話ができ、俳句を詠めるレベルまで、大きく開いており、学生大使の人数が多くなってからは、ビギナーコースとアドバンスコースに分けました。

クラス分けをする前はファッション用語や日本の月ごとの行事、各都道府県の特徴、自分たちの名前の意味の紹介を行い、ビギナーコースでは否定文や疑問文の作り方や動詞についてなど主に文法を、アドバンスコースではマジカルバナナやおはじき、囲碁などのゲームや社会問題についての話を通じて会話の練習をしました。ひらがな・カタカナができない学生には授業時間中に個別に対応しました。



#### ・教室外での交流

学生は全員英語が堪能だった為、日本語が堪能な学生以外とは英語を使って交流し、基本的なインドネシア語を教えてもらいました。

学生はとても親切で、昼食や夕食を共に食べたほかに、ボロボドゥールなどの遺跡や

王宮、大学構内で毎週開かれる朝市、多くの学生が習慣としている朝のジョギング、大通り、ビーチ、カラオケに連れて行ってくれました。

仲がよくなるにつれ、自分の将来や宗教、国の発展・問題についてなど、少し踏み込んだ話をするできるようになりました。

日本語クラスの学生のほかにも、大学内で開催されていた「ジョグジャカルタ ジャパンウィーク」という日本を紹介するイベントで知り合った学生と同じ趣味を持っているため、インドネシアにもその趣味を持つ人が多くいることを知り、趣味に関するイベントや専門店、普段の活動などについて話をすることができました。彼女とは **facebook** で友達になり、今でも交流しています。

また、偶然バスで隣に座った方や空港で同じ便を待っていた方とも話をすることもできました。かなり多くの現地の方と交流することができたと思います。



#### ・感想

今回のインドネシアでの滞在は、私にとって初めての海外でした。この体験でいろいろなことを学ぶことができましたが、自分の中で一番大きく残っているのは「一面的なものを見方をしてはいけない」ということです。

私は出発前、「インドネシアは日本に比べて貧しい発展途上国で、国民は皆宗教に対する信仰心が厚い」と信じて疑いませんでした。また、「日本人と違い、外国人は簡単に自分の非を認めず、謝らない」と考えていました。これらは、本や講義、テレビ番組などで得てきた知識です。

しかし、インドネシアに滞在し、この考えが思い込みに過ぎなかったことに気づかさ

れました。

学生に連れて行ってもらったショッピングモールは四階建てで、日本にあっても全く違和感のない、広くてしっかりとした作りでした。またカラオケは見たことがないほどに豪華で、大学内での食費が一食100円、なのにもかかわらず、4000円のコースメニューがありました。学生の一人に聞いたところ、IT関係のアルバイトの時給は2000円だということです。一方で、観光地や大学構内にはたくさんの物乞いがあり、中には障害を持っている方もいるようでした。山にある集落の小学校は崩れそうで不安になる土壁で窓ガラスがありませんでした。

「私が想像していたとおりのインドネシア」と「想像とは逆のインドネシア」、同じ国でも、地域や町で経済状況が異なるのは当たり前ですが、私にとっては大きなショックでした。

また、インドネシアの方は日本人よりも気軽に、しっかりと謝ってきました。

本を読んだり、人から聞いただけの知識でわかった気になり、偏ったイメージで一面的に捉えることの危うさを知ることができたことが、今回の滞在の一番の収穫です。

